

優秀賞

平和な社会をつくるために
岩手大学教育学部附属中学校
3年 高橋 和花

2025年6月、私の平和に対する考え方を大きく変化させる出来事があった。学習旅行だ。私の学校では、戦後80年という節目に合わせて、広島に行くことになった。

学習旅行前。私にとって平和とは「誰もが安心して暮らせる社会」だった。今思えばとても抽象的で、自分の中で具体的なイメージはできていなかったのだと思う。

学習旅行では、広島合唱団の皆さんと交流したり、広島県被団協の箕牧智之さんのお話を聞いたり、岩手にいてはなかなか出会えない人のお話を聞き、貴重な経験をすることができた。その中でも特に印象に残っているのは、平和記念資料館を訪れたことだ。そこでは、被爆した方々一人ひとりの人生が、丁寧にパネルで紹介されていた。身体中に火傷を負った子どもの写真。目が取れてしまった人の絵。焼け残った服。とても直視できないようなものばかりだった。訪れた全員が無言で、一つひとつの事実と向き合っているように感じた。ただどうしても、考えてしまうことがあった。それは、命の価値の大きさを痛感する一方で、原爆が落とされた時は、大勢の中のただの一人でしかなかったこと。無差別に多くの命を奪っていく原爆は、本当に恐ろしいものだと思う。実際に自分の目で見なければ分からない事実ばかりだった。同時に、今必要なことは、全員が正しい知識をもって向き合うことなのだと強く感じた。

岩手に帰ってきてから、平和のために少しでも何かしたいと、私は二つの挑戦をしている。

一つ目は、地域の平和に関するイベントに参加することだ。8月には、地域の公民館で戦後80年の事業が行われた。学校でこのプリントが渡された時、すぐに「参加して平和について考えたい」と思い、友達を誘った。地域のイベントや集まりに参加することが少し苦手な私にとって、大きな変化だったと思う。

その会で私は、長崎で被爆し、その後岩手に移住してきた方のお話を聞いた。自分が被爆者だと知らされずにずっと過ごしてきたこと。出身が長崎だというだけで、うつるんじゃないかと友達が離れていったこと。自分が作った料理すら食べてもらえなかったこと。想像できないほどつらい人生だった。原爆は、被爆者のその後の人生すらも変えてしまうのだと強く感じた。

二つ目は、委員会活動だ。私は広報委員長として学校の新聞を作成している。

学校の一大イベントである文化祭に向けて、平和に関する新聞を書こうと考えている。私たち3年生が広島で学んできたことを、より多くの人に知ってもらおうと思ったからだ。自分の平和に対する考えを深められたからこそ、提案できたことだと思う。

中学生一人の気持ちが変わっただけで、何が変わるのか。そう思う人もいるかもしれない。もちろん私には、世界を動かすような力など少しもない。大人になってからも、それは変わらないかもしれない。でも、私たちが戦争について正しい知識をもつこと、この事実を忘れないことは、少なからず意味があるのではないか。争いごとはダメだと心に誓い、周りの友達を大切にできたら、平和な世界に少しずつでも近づいていくと思う。

今の私が考える平和は「すべての人が、人生が、命が平等に大切にされること」だ。一見抽象的に思えるかもしれないが、自分が何を大切にすればいいのかは分かってきたように感じる。誰かの命が軽視されるようなことは絶対にあってはならない。それは日常生活でも同じだ。自分が発した一言が、誰かを深く傷つけてしまうかもしれない。自分のした行動が、誰かの人生を壊してしまうかもしれない。「平和＝戦争がない状態」だけではない、もっと根本的なものがあるのだと思う。

地域のイベントで被爆者の方のお話を聞いた時、その方はこう言っていた。「自分のことをよく知り、周りに流されないでほしい。そして、本当に自分のことを分かってくれる人を大切にしてください。やっぱり、人を思いやる心です。」

平和とは何なのか、私たちに何ができるのか、それを追い求めるために、私のチャレンジは続いていく。